園だより　５月号

新宿区立西戸山幼稚園　令和７年４月30日発行

クモとアリ

園長　佐藤淳穂

小鳥のさえずりがにぎやかな新緑の幼稚園。ぶどう棚ではキジバトが巣をつくって卵を温めています。生命が躍動するこの季節、まさかクモのことでこんな気持ちになるとは思いもよりませんでした。

昨年の11月に保護者が園門の前で見つけた大きなクモのことです。広げた足の端から端までを測ると７～8センチもあって、駆け付けた私も絶叫しましたが、とりあえず捕獲して園内に持ち込みました。当時の年長組はくぎ付けになってクモを観察し、図鑑を広げて「アシダカグモ」ではないかと推察したのでした。

その後、餌になりそうな虫を捕まえては与えましたが、寒くなるにつれクモはほとんど動かなくなりました。そして、先週のある朝、事態は急に動いたのです。冬の間、じっと張り付いていた朽ち木を離れて歩き出したかと思うと、お尻を動かして泡のようなものを出し始めたのです。その日の昼には、泡のようなものは直径２センチほどの丸い円盤のようなものになっていました。「マシュマロかな」「誰かラムネを入れたんじゃない？」子どもたちは白くて丸いお菓子を想像していました。クモはその白くて丸い塊を 2 本の足でしっかりと抱きかかえ、片時も放さずに持ち歩いています。

クモの繁殖について調べることになるとは…。未知なることに遭遇したときのわくわくした高揚感が、今、園内に漂っています。おそらく卵に間違いないのですが、飼育ケースを見入っているＡさんは「ラムネかな」と言っていました。子どもたちは半信半疑です。

今日はＢさんが画用紙でクモを作りました。それを見た子どもたちが次々に第２号、第３号と作り出し、あっという間に４匹になりました。Ｂさんは白い紙を丸めてクモに持たせました。「それはなあに？」と尋ねると「卵」と言っていました。Ｂさんは卵だと思っているようです。（有精卵だとすると一か月後には約300匹の赤ちゃんが誕生するとか…。）

園庭では、吊り輪の下に敷いているマットをめくったところに、大きなアリの巣が発見されました。通常は土の中にあるアリの巣が地面の表面にくねくねと現れたのです。突然、自分たちの住処が白昼にさらされて、アリたちは大騒ぎです。あちこちの穴からアリがぞろぞろと出入りし、中には翅の生えたものいました。「女王ありだ！」「飛ぶのかな」子どもたちはアリの世界に大興奮です。自然は、いつもそこに同じように存在する玩具からは得られない驚きや発見をもたらしてくれます。小さな生き物に出会える暮らしが生命の神秘や尊厳を感じることにつながっていくでしょう。